

公 民 [倫 理] (100 点 50 分)

2010年6月8日(火)3限 実施
前期中間考査
千葉県立長生高等学校 第3学年 ABCD組
Edited by K.Kataoka

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙は問題用紙の中にはさんであります。
- 3 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には問題で指定された番号の解答欄に解答を書き、選択問題については正解の番号をマークすること。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。

倫 理

(解答番号 [1] ~ [50])

第 1 問 次の文章を読み下の問い (問 1 ~ 問 8) に答えよ。(配点 20)

人間は、ただ世界に埋没して生きているのではない。自分のまわりや自分自身について真実を知ろうとする精神的な欲求をもっている。古くはどの民族でも、神話 (ミュトス) がこの欲求にこたえていた。神話は、ものごとを神々の意志と力によって生じるものと考え、そうした考え方にもとづいて世界のあり方や人間の生き方を全体的・統一的にとらえようとしたものである。ギリシアでも神話が発達し、さまざまなものごとが、[1] を最高神とする (a) オリュンポスの神々やその他の神々の働きとむすびつけられて説明された。人間についても、不死である神々と対比されて、死すべきものとしての有限なあり方が強調され、[A] が説かれた。

こうした、ものごとが神々の働きによってもたらされるとする考え方 (神話的世界観) が人々を支配していたなかで、紀元前 6 世紀の初頭に、当時の先進的な地域であった小アジア・イオニア地方に新たな考え方をする人々があらわれ、哲学がはじめられるようになった。初期の哲学者たちは、とくに自然 (ピュシス) を考察した (自然哲学)。彼らは神話的世界観を排して、自然の世界は神々の恣意的な働きに左右されるものではなく、それ自体で確固とした秩序をそなえた存在であり、また、その秩序は人間の観察と思考によってとらえられ、さらに、秩序の根拠も人間のロゴス (理性) の働きによって自然そのもののうちに把握されうると考えた (合理的世界観)。ゆるぎない秩序をもつととらえられた自然の世界全体は、やがて (b) コスモス とよばれるようになった。

最初の哲学者タレスは、水を (c) 万物の根源 と考え、水によって世界のなりたちとその諸現象を説明しようとした。その後ピュタゴラスは、世界の秩序の根拠を数に求め、世界には数的比 (ロゴス) にもとづく調和 (ハルモニア) があると考えた。ヘラクレイトスは、万物の原理を火とし、(d) 世界の秩序を動的にとらえた。また [2] は、火・空気・水・土 (四元) を万物の構成要素と考え、[3] は、無限にひろがる空虚のなかを運動する無数の原子 (アトム) の集合と離散によって世界のあらゆる事物・事象を説明しようとした (原子論)。

彼らが主張した個々の具体的な説はこんにちからみれば素朴であるが、彼らがみいだした自然全体を「コスモス」ととらえる考え方そのものは、人間が自分自身の知に信頼をおきながら世界を認識していくさいに基礎となるものであり、高く評価されるべき内容を含んでいる。

問 1 文章中の [1] ~ [3] に入る最も適当な語を記せ。

問 2 下線部 (a) に関連して、次の叙事詩の作者は誰か。 [4]

女中たちがオデュッセウスの体を洗って、オリーブ油を肌に塗り、肌着を着せ、上から美しい上衣を羽織らせると、オデュッセウスは湯船から上がり、酒盛り中の男たちの方へ向かおうとした。この時天与の美貌に輝くナウシカアは、堅牢な作りの天井を支える柱によってたっていたが、オデュッセウスを目の当たりに見ると感に堪えぬ面持ちで、翼ある言葉をかけていうには、
「ではお客様、ご機嫌よう、国へお帰りになっても、いつかまた私のことを思い出してください。」

問3 下線部(b)の宇宙の秩序を意味するコスモスに対して、「混沌」を意味するギリシア語は何か。カタカナで記せ。[5]

問4 下線部(c)の万物の根源，始源，原理をあらわすギリシア語をカタカナで記せ。[6]

問5 下線部(d)に関して，**? a?ta ?e?** (panta rhei) というヘラクレイトスのものといわれている言葉の意味を日本語で答えなさい。[7]

問6 空欄 [A] に入るもっとも適当な記述を，次の ~ のうちから一つ選べ。[8]
論理(ロゴス)的に世界を見つめて学究生活をおくる生き方
傲慢(ヒュブリス)におちいることなく人間としての分をわきまえた生き方
慈愛(アガペー)をもって神を愛するとともに隣人と愛し合う生き方
神の模倣(ミーメーシス)としての人間の能力を最高に引き出す生き方

問7 次の文は誰の残した断片か。もっとも適当なものを，次の ~ のうちから一つ選べ。
[9]

「ある，あることはないということはない」という道にはこの道を証している多くのしるしがあるとされる。それは「不生」「不滅」「全一性」[不動]などである。その理由は，「(それは)いま，いっしょになって，すべてが，一つに，くっついているからだ」とされる。

パルメニデス アナクシメネス アナクシマンドロス ディオゲネス

問8 ギリシア神話とギリシアの自然哲学についての記述として適当でないものを，次の ~ のうちから一つ選べ。[10]

ヘロス(英雄)とは，女神と人間の父との間に生まれたアキレウスのように神の血を引く人間であると考えられていた。

アンゲロス(天使)とは人間よりも上位の存在として創造された，純粋に精神的な実体をいう。

タレスは，アリストテレスにより，素材(質料)因を万有の原理とした最初の人物として哲学史の発端に位置づけられている。

近代を開く象徴的事件であったコペルニクスの宇宙論やケプラーの宇宙モデルも，ピュタゴラス学派の思想がヒントになっている。

第2問 次の文章を読み、下の問い(問1～問9)に答えよ。(配点 20)

ある日ソクラテスは、友人から、「ソクラテス以上の知者はいない」という(a)デルフォイの神託を告げられる。自分自身は知者などではないと自覚していたソクラテスは、これにとまどい、神託の真の意味をさぐろうとした。そこで、当時「知者」と思われていた人々を訪ね、実際に自分よりすぐれた知者がいることを確認して、神託に反論しようとした。しかし、対話による吟味の結果、ソクラテスが発見したのは、そうした人々は世間から知者だと思われ、自分自身でもそう思いこんでいるが、実際にはそうでないということであった。とくに [11] の事柄というもっとも重要なことについて対話した人々はみな、あいまいな考え方に満足していたのである。

ソクラテスは、この対話による吟味のなかから、次のような逆説的真理を理解した。善美の事柄について無知であるのは、対話相手も自分も同じである。しかし、対話した人々は知らないのに (b)知っていると思いきこんでいるが、自分は知らないからそのとおり知らないと思っている。このように、無知の知をもっている点で、自分の方が知者なのである。神託が告げたのも、人間が無知の状態にあることを自覚し、それをきっかけとして本当の知を求めることの重要性であった。

このような自覚のもとに、ソクラテスが (c)対話活動を通じてアテネ市民に語りかけたのは、「自分自身の [12] がすぐれたものになるように配慮せよ」ということであった。ソクラテスにとって、[12] がすぐれたものであることこそ徳にほかならない。当時の人々が求めていた金銭や名誉なども徳があつてこそはじめて幸福に結びつく。そのような徳は、本当によいこと、正しいことを知ることによって得ることができる。この徳は知であるという考え方は、(d)人のすぐれたあり方(徳)を家柄や財産に求める伝統的な考え方や、政治的な有力者になる能力であるとする (e)ソフィストたちの考え方とも、根本的に異なるものであった。

ソクラテスは、このように対話を通じて魂のすぐれたあり方を探究することを (f)「哲学」とよんだ。彼にとって「哲学」とは、たんに合理的で統一的な知識を求めるというだけではなく、いかに生きるべきかを、議論を通じて探究する営みとして、積極的な意味をもっていたのである。

ソクラテスの活動は多くの青年をひきつけたが、一部の市民からは、神を冒とくし青年たちを墮落させるとみなされ、彼は裁判で死刑を宣告された。友人たちのなかには、評決が不当であると主張して脱獄を勧める者もいたが、ソクラテスはこれを拒否し、毒杯をあおいで死をむかえた。彼にとって重要だったのは、ただ生きのびることではなく、自分が考えぬいたうえで正しいと判断した生き方にしたがうことだったのである。「[A]」ということだが、彼の信念をよく伝えている。

問1 空欄 [11]・[12]に入る最も適当な語を記せ。

問2 下線部(a)に関して、デルフォイのアポロン神殿の柱に刻まれていたという、sa?t?? (gnothi seauton) という言葉の意味は何か。[13]

問3 下線部(b)のような、思いこみの知(臆見)をギリシア語で何というか。最も適当なものを次の ~ のうちから一つ選べ。[14]

スキエンツィア ドクサ エピステーメー パラドクサ

問4 下線部(c)に関して、次の対話の中の空欄[15]に入るゴルギアスの考えとして最も適当なものを、下の ~ のうちから一つ選べ。

ソクラテス 「また、医療のことを学んだ者は医者になるわけですね？ そして、その他のことについても同じことが言えませんか。つまり、それぞれその道のことを学んでしまった者は、その知識が各人をつくりあげるような、まさにそういう人間になるのだと。」

ゴルギアス 「たしかに。」

ソクラテス 「同じ理屈でまた、正しいことを学んだ者は正しい人になるのではありませんか。」

ゴルギアス 「間違いなく、そうだ。」

ソクラテス 「正しい人は正しいことをするのでしょうか？」

ゴルギアス 「そう。」

ソクラテス 「そうすると、[15]を身につけた者は必然的に正しい人間だということになり、そして、正義の人として正しいことをおこなおうと願うわけですね？」

ゴルギアス 「そういうことになるようだ。」

(プラトン『ゴルギアス』)

自然学 倫理学 弁論術 形而上学

問5 上の対話のように、ソクラテスが相手の無知を自覚させるためにおこなった問答法をギリシア語で何というか。カタカナで答えよ。[16]

問6 下線部(d)に関して、人のすぐれたあり方(徳)をギリシア語で何というか。カタカナで答えよ。[17]

問7 下線部(e)に関して、プロタゴラスの考え方の例として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[18]

真理などというものははじめから存在せず、もし存在したとしても知ることはできないし、そもそも伝えることができない。

正しく善く生きることこそ人間が人間である以上、求め続けるべき最高の、そして共通の価値である。

ピュシスのロゴスは宇宙全体を支配するとともに、人間をも支配しているのだから、ピュシスに従って生きるべきである。

それぞれのポリスの法や習慣などはノモスであり、それらが正しいかどうかの判断基準は人それぞれである。

問8 下線部(f)について，哲学とはもともとギリシア語ではどのような意味だったか。簡潔に答えよ [19]

問9 空欄 [A]に入るソクラテスの考えとして，最も適当なものを次の ~ のうちから一つ選べ。 [20]

ポリスの法に従う従順な生き方こそ市民のつとめである
たんに生きることではなく，よく生きることこそ大切である
人生の禍福は糾^{あざな}える縄のようなものである
愛はすべてを支配する。されば我らも愛に従おう。

第3問 次の文章を読み、下の問い(問1～問8)に答えよ。(配点 20)

ソクラテスの弟子プラトンは師の思想を発展させ、イデア論とよばれる独自の考え方にもとづいて人間・社会・自然を論じ、[21]主義的な哲学を展開した。

ソクラテスは、勇気などの倫理的な徳を知ることがその実行にただちにつながると考え、倫理的な徳についての確実な知識、それらの定義を求めた。そこで問われたのは、たとえば、勇気ある行為の具体例をあげることではなく、個々の勇気ある行為をひとしく勇気ある行為としてなりたさせる、勇気そのもの、(a)勇気の本質であった。プラトンは倫理的な徳だけでなく、ひろくものごと全般について本質を問題にし、個々の具体的なものではなく、それらの本質・根拠となる普遍的なものこそが、確実な知識の対象であると考えた。そして、普遍的なものは、目や耳などを通じた感覚ではなく、思考能力としての[22]によってとらえられるとして、そのような普遍的なものをイデアとよんだ。

こうした考え方にたってプラトンは、もろもろのイデアからなる世界こそが真の实在の世界であると主張した。そして、イデアの世界にはその頂点に[23]のイデアがあって、それが他のイデアを統一し、秩序づけているとした。

プラトンによれば、人間は魂と肉体からなり、魂はかつてひとりイデアの世界にあって、もろもろのイデアを明瞭にとらえたことがあるという。(b)魂は、この世にうまれるとともに肉体という牢獄のなかにとじこめられ、そのために、イデアの記憶があいまいになった。しかし、魂にはかつて接した(c)イデアの世界への思慕の情があり、それを原動力にしてイデアを(d)想起し、[A]が、幸福につながる人間の本来の生き方であると彼は主張した。

問1 空欄[21]～[23]に入る最も適当な語を記せ。

問2 下線部(a)に関して、プラトンは勇気の徳を魂のどの部分をよく働かせることによって実現すると考えたか。魂の部分を答えよ。[24]

問3 下線部(b)のようなプラトンの人間観は、ある自然哲学者の思想の影響によるものである。その自然哲学者の名前を答えよ。[25]

問4 下線部(c)のようなプラトンの愛をあらわす記述として最も適当なものを、次の～のうちから一つ選べ。[26]

- 対象が無価値であるにもかかわらず愛を与え続ける営み
- 純粋な価値ある善美を、自らに欠けるがゆえに求める営み
- 個人的な倒錯した性愛にもとづく、物質的な営み
- 本能的な獲得衝動に発する経済的な営み

問5 下線部(d)に関して、想起をあらわすギリシア語をカタカナで答えよ。[27]

問6 空欄[A]に入る記述として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。

[28]

- イデアの世界を忘れ去ること
- イデアの世界と合一すること
- イデアの世界を学び知ること
- イデアの世界に帰ること

問7 プラトンの国家についての思想として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[29](2005 年センター本試験改題)

統治者階級は知恵を身につけ、防衛者階級を支配し、防衛者階級は徳を身につけて生産者階級を支配する。さらに生産者階級が防衛者階級に従って徳を身につけたとき、国家の三部分に調和が生まれ、正義が実現する。

一人の王の統治は、知恵を愛する王による統治であっても、つねに独裁制に陥る危険性を孕んでいる。それゆえ防衛者階級も生産者階級も徳を身につけ、民主的に政治を行う共和制において正義が実現する。

知恵を愛するものが王になることも、王が知恵を愛するようになることも、いずれも現実的には難しい。知恵を愛するものが徳を身につけた防衛者階級と生産者階級とを統治するとき、正義が実現する。

知恵を身につけた統治者階級が、防衛者に対しては臆病と無謀を避けるよう習慣づけ、生産者階級にたいしては放縦と鈍感を避けるように習慣づける。このようなときに正義が実現する。

問8 次のハンナ・アーレントのプラトン批判についての文(佐々木毅『プラトンの呪縛』より引用)を読み、後の【まとめ】の文中の空欄に入る最も適当な組み合わせを、後の ~ のうちから一つ選べ。[30]

二十世紀後半のもっとも刺激的な政治理論家の一人であり、決して単純な自由主義者とはいえないハンナ・アーレントの場合にもプラトン問題は大きな影を落としている。彼女にとって古代ギリシア世界はある意味で政治そのものがもっとも印象的に開花した時代であり、そこでの実践的生活は彼女の人間論、政治論の原型をなしていた。彼女の「労働」「仕事」「行為」という人間の三つの活動力の分類は有名であるが、このうち、「行為」こそは複数の人間の間で言語を媒介にして形成される、人間の自由と個性が顕在化する関係の網の目と考えられる。暴力からはもっとも遠い、自発性と信頼からなる空間である。この「行為」の具体的姿の代表例はギリシアのポリスの政治活動 ペリクレスの時代のような に求められたが、「行為」はもろさ、はかなさをその特徴とし、それが自由と表裏一体となっている空間であった。これに対して人間の生物的再生産を際限なく営むのが「労働」であり、人間を「労働する動物」と規定したマルクスは「労働」の哲学者であった。また、「仕事」は一定のモデルにしたがって素材を加工して制作(製作)を行う活動形式であり、机や椅子といった物的実在から詩や歴史書に至るまで我々の生命から独立した客観的世界を作り出す活動形態とされた。……

『ポリテイア』(プラトンの『国家』)において哲人王は職人が自分の尺度や物差しを使うようにイデアを用いている。彼は彫刻家が像を作るように、自分の都市国家を「作る」のである。……このようなものの考え方からすれば、人間事象のテクニクを習得したある人物が、一つのモデルにしたがってユートピア的な政治を組み立てるのは、ほ

とんど自明のこととなる。プラトンは、政体を作るための青写真を考案した最初の人物であり、その後生まれたあらゆるユートピアに靈感を与えている。……これらのユートピアは、意識的にしろ無意識的にしろ、行為の観念を製作の観点から解釈しているような政治思想の伝統を保持し、発展させるもっとも効果的な手段の一つであった。

……この伝統の発展の中で注目すべきことが一つある。いうまでもなく、暴力は製作に必ず伴うものである。したがって、行為を製作の観点から解釈する政治的計画や政治思想では、暴力がいつも重要な役割を果たしてきた。……しかし、近代になって、人間は自分の作るものだけを知ることができ、人間のいわゆる一層高い能力は製作に依存しており、したがって、人間は何よりもまず「工作人」であって、「理性的動物」ではないという確信が生まれたとき、人間事象の領域を製作の分野と見なす解釈にもともと含まれていた暴力の意味が前面に出てきたのである。このことは、近代に特徴的な一連の革命にとくに印象的に現れている。

ハンナ・アーレント『人間の条件』より

【まとめ】

ハンナ・アーレントは、それまで政治を[ア]モデルで理解していたギリシアの政治観を、根本的に転換したのがプラトンであると考えた。政治を[イ]モデルで理解するプラトンの政治観は、政治に対して真理と権力との結合、暴力の動員を定式化することにつながり、それが複数の主体を前提とする政治を破壊することになる。プラトンは[ア]を[イ]で置換することによって、人類の政治論議の大枠に重大な負の影響を及ぼしたのである。

- ア - 労働 イ - 仕事
- ア - 労働 イ - 行為
- ア - 仕事 イ - 労働
- ア - 仕事 イ - 行為
- ア - 行為 イ - 労働
- ア - 行為 イ - 仕事

第4問 次の文章を読み、下の問い(問1～問8)に答えよ。(配点 20)

アリストテレスの思考の大きな特徴の一つに、言葉の多義性に注目した分析の精密さがあげられる。彼は 名辞 述語 命題 などといった根本概念を確定したうえで史上初めて(a)三段論法の定式化をなしとげ、その後の論理学の基礎をきづいた。彼は自身の説を展開する際に彼以前の哲学者の説を紹介・批判することが多いが、彼の創始した多数の用語・概念は、その場合にも威力を発揮する。彼によれば、どんな学問も第1の原理・原因を知ることによって初めて本当の知識となるのだが、自然の事象の原因となるものには4種類ある。すなわち、(1)形相因(何であるか、本質)、(2)質料因(何からできているか、素材)、(3)始動因(運動変化を起こさせるもの)、(4)目的因(何のためか)がそれである。彼はタレス以来の彼に先立つ哲学者たちの求めていたものがこの4原因のどれかに当たり、その範囲を出るものではないと見た。

このうちの形相因は、ソクラテスの「何であるか」の問いと、それを引き継いだプラトンのイデア論の考えを受け継ぐものである。しかしアリストテレスは、(b)イデア論そのものは批判し退けた。彼の形相(エイダス)はそれと異なり、つねに[31]と対をなし、具体的な個物のうちに(規定の言葉(ロゴス)において以外は) [31]と切り離せないものとして結びついているものである。この形相(エイダス)と[31]はまた現実態(エネルゲイア)と可能態(デュナミス)とにそれぞれ対応する。たとえば[31]としての木材は家の可能態であり、大工によって形相を与えられて現実の家となる。この場合、家の形相は目的でもあるが、自然物、すなわち運動変化の始原を自身のうちにもっているもの場合には、「人間が人間を生む」という彼の愛用した言葉が示すように、始動因(生む人間)も形相・目的因と一つに帰着する。彼は自然界に内在するこのような形相と目的とを発見することのできる喜びに駆られて、生物学の分野、とくに動物学の研究に打ち込み、数百種の動物を記述して類・種による階層的な分類を行うという巨大な業績を残した。そのような生物の生育もさらに上位の天体の運動も含む自然界のあらゆる動(運動・変化)の最終的な原因(根拠)となるもの、これを彼は、みずからは動かされることなしに他のものを動かす不動の(第一)動者としての神とする。この神のあり方は、いかなる素材的要素とも無縁の純粋な知性の現実活動として語られている。今日[32]と呼ばれているものを彼は第一哲学とか神学とか呼んだが、それは「存在を存在として」普遍的に研究する学問であるとともに、このような神について考察するものでもあった。彼は、(c)人間にとって最高の幸福は、その最も優れた特性たる知性的徳にもとづく現実活動、神の生にも似た知性の観想にあるとしながらも、通常の人間的な幸福は実践をも含めた人間の活動全体にあるとして、正義・勇気・節制などの[33]的徳について広範に論じ、この徳を、(d)両極端を排した中庸において行為を選択できる心の状態だと規定している。

問1 空欄[31]～[33]に入る最も適当な語を記せ。

問2 下線部(a)に関して、三段論法とは二つの前提が真であれば必然的に結論が真となる形式の推論であるが、推論の真偽ではなく、推論の形式として間違っているものを、次の

～ のうちから一つ選べ。[34]

- { [大前提] すべての動物は死ぬ。
- { [小前提] すべての人間は動物である。
- { [結論] すべての人間は死ぬ。

- { [大前提] すべての人間は動物である。
- { [小前提] すべての人間はほ乳類である。
- { [結論] すべてのほ乳類は動物である。

- { [大前提] すべての音楽家は芸術を愛するものである。
- { [小前提] すべての作曲家は音楽家である。
- { [結論] すべての作曲家は芸術を愛するものである。

- { [大前提] すべてのAKB48のメンバーはアイドルである。
- { [小前提] 国生さゆりはAKB48のメンバーである。
- { [結論] 国生さゆりはアイドルである。

問3 下線部(b)に関して、アリストテレスのイデア論批判の内容としてもっとも適切なものを、次の ～ のうちから一つ選べ。[35]

理性でとらえられる抽象的な形相こそが実在であり、本質は個物を超越して存在する。

理性でとらえられる抽象的な形相こそが実在であり、本質は存在しない。

感覚でとらえられる具体的な個々の事物（個物）こそが実在であり、本質は存在しない。

感覚でとらえられる具体的な個々の事物（個物）こそが実在であり、本質は個物に内在する。

問4 下線部(c)に関連して、幸福をあらわすギリシア語としてもっとも適切なものを、次の ～ のうちから一つ選べ。[36]

エピステーメー グノーシス パイディア エウダイモニア

問5 下線部(d)に関して、アリストテレスが用いている中庸の例の記述として最も適切なものを、次の ～ のうちから一つ選べ。[37](2007年センター本試験より)

極端な快樂と極端な禁欲を避けながら、静かな修道生活を送ることで、心の平安を得ることができる。

金銭や財に関して、必要以上に惜しんだり浪費したりしないよう習慣づけることで、おおらかな人になる。

神の知を持っていないと自覚することで、最大の無知から解放され、人間にふさわしい知恵を得ることができる。

恐れるべきものとそうでないものを正しく判断できるように知的訓練を積むことで、勇気のある人になる。

問6 次のアリストテレスの著作『ニコマコス倫理学』の正義についての記述中の空欄[38]に入る語を漢字一字で書け。

われわれは、それゆえ、「不正なひと」というのは幾様の意味において語られているか、という区別から始めよう。不正な人であると考えられるものには、一方では「違[38]的なひと」があり、他方では過多をむさぼりがちな「不均等的なひと」があるのであって、したがって、正しい人とは「適[38]的なひと」ならびに「均等を旨とするひと」であることは明らかであろう。してみれば、正義とは適[38]的ということと均等的ということとの両義を含み、不正とは、違[38]的ということと不均等的ということとの両義を含む。

問7 次のアリストテレスの著作『政治学』の国制についての記述中の空欄[39]に入る語を漢字二字で書け。

そこで、明らかに、およそ国民共通の[39]を追求する国制はいずれも、全般的な正義にかなっていないがゆえに、結局、正しい国制であるが、ただ支配者たち自らの私利私欲のみを追求するそれらは、すべてあやまった国制であり、正しい国制の道を踏み外したものどもである。というのは、それらは（奴隷に対して主人がそうであるように）独断専制的だからである。しかるに国家は（もともと）自由人の共同体なのだから。

問8 次のアリストテレスの著作『詩学』の悲劇についての記述中の空欄[40]に入る語を書け。

悲劇とは、一定の大きさをそなえ完結した高貴な行為、の再現（ミーメーシス）であり、快い効果を与える言葉を使用し、しかも作品の部分部分によってそれぞれの媒体を別々に用い、叙述によってではなく、行為する人物たちによっておこなわれ、あわれみとおそれを通じて、そのような感情の[40]を達成するものである。

第5問 次の文章を読み、下の問い(問1～問9)に答えよ。(配点 20)

これまでみたソクラテスをはじめとするギリシアの思想家たちは、ポリスの一員(市民、ポリテース)としての人間の生き方を探求した。しかし、紀元前4世紀後半にアレクサンドロス大王によって東西にわたる世界国家(コスモポリス)が建設されると、ギリシア文化とオリエント文化が混交し、[41]とよばれる独特の文化が形成されるにいたった。人々はそれまでのポリスの絆を失い、一人ひとりが広大な世界国家に投げだされた。この[41]時代に人々が求めたのは、ポリスにしばられない(a)世界市民(コスモポリテース)としての生き方であり、政治や社会の動乱に左右されない、個人の内面的な自由と平安の確保であった。この時代を代表するエピクロス派とストア派の思想は、ともにそうした要求にこたえるものであった。

エピクロスは、人間は本性上快樂を追求する存在であるにとらえ、快樂は善であり、快樂のうちに幸福があると主張した(快樂主義)。エピクロスは、(b)快樂について理論的考察を加え、真の快樂は刹那的・衝動的なものでなく、永続的・精神的なものであると主張した。肉体的快樂の追求にはむしろ消極的であり、「水と一切れのパンがあれば足りる」と述べている。彼は、みずから足るを知る簡素な生き方(自足、アウタルケイア)を実践するとともに、他方で、迷信や死の恐怖を理論的に根拠がないものと認識することによって精神的不安や苦痛をとりのぞくことが、真の快樂をもたらすと考え、そうした実践と理論的考察の両面を通じて実現される魂の平静([42])が賢者の理想であると説いた。エピクロスは、公人として活動することは魂の平静を妨げるとして「[43]生きよ」と説いた。

(c)キプロスのゼノンを創始者とするストア派の人々は、「自然と一致して生きる」ことが人生の目的であると主張した。その主張は、自然と人間についての独特の考え方にもとづいている。

彼らは、自然全体は[44]の支配する世界であり、人間は自然全体の一部として、自然によって[44]が与えられていると考えた。人間は、自分の自然的本性である[44]を自然全体の[44]に合致するようにはたらかせ、同時にそれを通じて、自然に反した過度の衝動である欲望・快樂などの情念(パトス)を克服して(禁欲主義)、「自然と一致した魂の状態」である(d)無情念(アパテイア)を実現し、そのことによって「自然と一致して生きる」ことができると主張した。ストア派は、「自然と一致した魂の状態」が徳であり、徳が唯一の善であり、「幸福であるためには徳だけで十分である」と考えた。彼らは、徳として、思慮・勇気・節制・正義をあげている。

ストア派は、自然全体は[44]的な法の支配するポリスであり、すべての人間は自然の法のもとで平等にその市民であると主張した。この考え方は、のちの自然法思想の源流の一つになった。

問1 空欄[41]～[44]に入る最も適当な語を記せ。

問2 下線部(a)に関して、次の文の著者は誰か。[45]

われわれは市民である。市民ならば、ある公共体に参与する。その場合には、宇宙こそは、まさに、国家(ポリス)という組織体の類(たぐ)いである。それ以外のいかなる公共体に全人類が参与するとでも、ひとはいうのか。

『自省録』より

問3 下線部(b)に関して、次のエピクロスの考察の空欄 [46] に入る語を漢字一字で書け。

「また、[46] はわれわれにとって何ものでもない、と考えることに慣れるべきである。というのは、善いものと悪いものはすべて感覚に属するが、[46] は感覚の欠如だからである。……われわれが存在する限り [46] は現に存在せず、[46] が現に存在するときには、もはや我々は存在しない。」

問4 下線部(c)に関して、キプロスのゼノンの生涯に関する記述として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[47]

最小限の生活必需品だけで生きる自然状態こそ、人間にとって最高の幸福だとした。衣服をつけず、靴もはかず、野犬のように街頭に寝泊りし、樽を棲家とし、公衆の面前で女性と交わったという。

若くしてアテナイに学び、キュニコス学派、メガラ学派、アカデメイア学派を経て、独自の哲学を確立し、アゴラの彩色柱廊にて学園を開く。

パルメニデスの高弟で、師の主張を彼独自の論法によって擁護した。すなわち彼は、相手の主張を一度受け入れ、その上でその前提からいかなる矛盾した帰結が生ずるかを証明してみせることによって、間接的に相手の主張を論駁(ろんぱく)した。

サモス島の生れ。前 307 年ころ、父の故郷であるアテナイに庭園つきの家をもとめ、そこに学園を創設した彼自身は花園の哲学者と呼ばれることになる。

問5 下線部(d)に関して、次の森鷗外『舞姫』冒頭の文中の空欄 [48] に入る、「アパテイア」のラテン語表現をカタカナで答えよ。

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱燈の光の晴れがましきも徒なり。今宵は夜毎にこゝに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。

五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりておもへば、釋き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげにしるしゝを、心ある人はいかにか見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のまゝなるは、独逸にて物学びせし間に、一種の「[48]」の氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

問6 新プラトン主義についての、次の文中の空欄 [49], [50] に入る語を書け、

新プラトン主義とは、後 3 世紀に [49] によって実質的に創始され、6 世紀まで存続した哲学思潮。その後のヨーロッパ哲学史上にプラトン主義の伝統を定着させる働きをした。[49] 自身かなり独創的な思想家であったが、自分の思想をすべてプラトン哲学からの帰結であると称していたので、この名がある。しかしプラトンにみられる政治的・実践的関心はあまりなく、もっぱら神学的・形而上学的局面に集中する。[49] に影響を与えたのはプラトン、アリストテレス、ストア学派、新ピタゴラス学派などの哲学であるが、ギリシア哲学ばかりではなく、その師アンモニオス・サッカスを介してオリエント、エジプトの神秘学からも多大

のものを受け継いだ。

古今東西の神秘哲学と同様，新プラトン主義は次の理論的支柱をもっている。

世界は可視的物質界と三つの不可視なる原理的な力よりなる。それは魂つまり生命力と，叡智つまり宇宙秩序の認識機能と，一者つまりあらゆる対立を統合する絶対者である。一者は「第一なるもの」または「善」と呼ばれ，それ自体はまったく単純なものでありながら，その中にありとあらゆる多様性を潜在的に含んでいる。これは完全な充実であり，あらゆる認識，生命，本質，存在を超越する。

「一者」から「叡智」が，「叡智」から「魂」が，あたかもあふれる水のように [50] する。下のものは上のものと本質を同じくするが，勢いや力の劣った存在形態であり，三つの原理的なものは階層的秩序を保ちながら，しかも連続している。「一者」から遠ざかるにしたがって「一者」の力を失うことから，善と完全性において劣ることになり，そこに階層的世界が生じる。

これで問題は終わりです。